

生活

火・水・木・土曜 掲載

TEL:098(865)5158

seikatu@ryukyushimpo.co.jp

患者の「口から食べる」支援



食支援の知識を現場でどう生かすか話し合う職員ら
11月12日、沖縄市

脳卒中や神経難病などが原因で、口から食べることが難しくなる「摂食嚥下障害」。沖縄市の医療法人タビック沖縄リハビリテーションセンター病院は、口から食べることの重要性に着目し、昨年8月から「口から食べるを支援するプロジェクト(KSP)」に取り組んでいる。院内の看護師や言語聴覚士らなど各専門職の職員らが約8カ月間、座学や現場実践などで患者の食支援について学んできた。摂食・嚥下障害看護認定看護師で、食支援のコンサルティングやセミナー開催を担う合同会社Comer(コメール)代表の大城清貴さんが指導役を務めた。

沖縄リハビリセンター病院(沖縄市)

多職種連携でプロジェクト

高齢社会に伴い摂食嚥下障害は増加傾向にある一方、医療現場で食支援の正しい知識や適切な技術を持つ医療従事者は少ない現状がある。大城さんによると、医療現場では患者の窒息や誤嚥を避けるために禁食を判断することがある。禁食は治療上必要な場合もある一方、安易に禁食とされることも多く、患者の回復を妨げるケースがあると

正しい知識と技術、多職種の連携で、摂食嚥下障害であっても口から食事を取れる患者も多いため、大城さんは県内の回復期・急性期病院、訪問看護ステーション、介護保険施設で、患者の食支援や口腔ケアの方法などを指導している。

沖縄リハビリテーションセンター病院が取り組むKSPは、看護師や言語聴覚士、管理栄養士、介護福祉士、作業療法士の多職種が参加する。昨年8月以降、口腔ケアや摂食嚥下のメカニズム、食事介助などの講義に加え、現場での実践指導も行われた。今月12日は、これまで学んだ知識をまとめることを目的にグループワークがあった。

四つのグループに分かれ、①低栄養のアセスメント(評価)②口腔ケア③お



Comer代表の大城清貴さん

大城さんは「食の支援は、知識や技術、思いに加えて、チームワークやエネルギーが必要。学んだ知識を現場で生かし、自分のスキルにしてほしい」と語った。沖縄リハビリテーションセンター病院の垣花美智江副院長は「専門性の異なる職種で食べることの大切さを共有できたことはとても意義がある。職員の食に対する姿勢が変わった」と話した。(吉田早希)